

西洋政治思想史研究の現状と課題

上村剛（東京大学）

政治思想史（history of political thought）とはその名のとおり、政治に関する思想や価値規範の探究が歴史上どのように行われてきたかを考えるものである。対象とする地域によって、西洋/東洋/日本政治思想史、あるいは比較/グローバル政治思想史などに細分化される。筆者の専門たる西洋政治思想史では、さまざまな古典、たとえばアリストテレス『政治学』、トマス・ホブズ『リヴァイアサン』、モンテスキュー『法の精神』といったテキストの解釈を通じて、そのテキストを正確に理解し、私たちの持つ政治思想の世界をより豊かにし、ひいては人類の平和と幸福に資するよう、日々研究者はつとめている。

だがその歴史の解釈枠組みについては、確たる基盤がない。どこから始め、どの思想家を対象とするのか、その選別基準がなにかは、実のところ不明である。その一因は、そもそも西洋についても、政治についても、思想についても、概念定義が不明瞭なことにあろう。とはいえもちろん、大まかな学問的傾向はみられる。

本報告は、2010 年代から西洋政治思想史研究に携わってきた者の視点から、近年の学問的傾向について、（一）研究の系譜、（二）近年の動向、（三）今後の展望、（四）学問的意義の四点を概観するものである。

まず第一節では、一人の著者による通史叙述が長らくなされていないために、個々の思想家の研究水準が大きく向上しているにもかかわらず、古代ギリシャ～中世～初期近代～近現代という通史の語りが依然として更新されていないと論じる。

第二節では、2010 年代以降、この 15 年間にどのような研究の進展がみられたのかを六点到に分けて示す。いずれも、大学教員を取り巻く研究環境が大きく反映されていると論じるのが、その特徴である。

第三節では、新規性と重要性/面白さを軸に研究を続ける研究者にとって、どのように今後の研究が展開されうるかを、新規性と面白さのそれぞれに分けて論じる。

最後の第四節は、西洋政治思想史の学問的意義がどこにあるのかを、主に明晰化、相対化、範例という三つの角度からそれぞれ論じることで、研究の意義を擁護するものである。